Ｎｏ．２３４【２０１６年１１月１１日配信】
畑井新喜司　シロネズミとシロナマコ（担当：鈴木）

先週 11 月 3 日の『東奥日報』に、太平洋地域の海洋生物学分野で功績のあった研究者に贈られる「畑井メダル」が、東北大学大学院生命科学研究科附属浅虫海洋生物学教育研究センターで公開されたとの記事がありました。このメダル名に冠される畑井新喜司（はたいしんきし）（1876-1963）は、センターの前身である大正 13 年（1924）に開所した東北（帝国）大学理学部附属浅虫臨海実験所の初代所長を務めたかたです。

東北大学理学部附属浅虫臨海実験所
（歴史資料室蔵）

明治 9 年（1876）に現在の平内町に生まれた畑井は、小湊小学校から東奥義塾、仙台の東北学院理科専修部に学び、さらに旧制一高教授の五島清太郎博士のもとでミミズを研究し生物学者としての道を歩み出しました。その後、明治 32 年から 22 年間アメリカで研究生活を送り、この間になされたシロネズミに関する研究は大正 14 年に帝国学士院賞を受賞しました。今日、シロネズミを実験材料として用いるのは、この研究が契機となっています。

やがて、大正 10 年に東北帝国大学理学部に教授として招かれて帰国し、日本で初めての動植物学両科をまとめた生物学科の創設に尽力しました。また、生物相が多様で交通も至便、保養地としても恵まれた浅虫の裸島付近に教育と研究のための臨海実験所と附属水族館をつくり、そこで多くの研究者を育てました。実験所は東北帝大で独占するのではなく広く門戸を開放する、当時としては先進的な運営で、国内外の研究者に施設を提供しました。その伝統は今も受け継がれています。

畑井は実験所において、カキやシロナマコの研究のほか、ナマズと地震の関連性に関する研究なども行いました。このシロナマコは食用にするナマコの白いものでなく、同じナマコでも半透明でイボも管足もない砂の中に生息する珍しい種類です。実験所ができて間もなく、畑井は学生たちと浅虫に近い茂浦島に行った際にシロナマコの群生地を発見しました。シロナマコは世界中に生息していますが、ここほど大量かつ容易に採集できる場所はなく、研究材料としても重宝したそうです。アメリカで「白鼠」（シロネズミ）を研究した畑井が、アサムシで「白海鼠」（シロナマコ）も研究することになったのは面白いですね。このシロナマコについて、昭和 15 年頃に畑井が昭和天皇にご進講したことがあり、海洋生物の研究者でもあった天皇は、戦後も「畑井のシロナマコ」を心にとめておられて懐かしんだそうです。